

機関番号：17102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520636
 研究課題名（和文）20世紀ロシア知識人のライフストーリーにみる親密圏と知的世界に関する研究
 研究課題名（英文）Russian Intelligentsia's Life stories, the Intimate Sphere, and the intellectual World in the 20th Century
 研究代表者
 松井 康浩（MATSUI YASUHIRO）
 九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授
 研究者番号：70219377

研究成果の概要(和文)：

ソヴィエト知識人や市民が残した日記、手紙、回想録を資料に用いた本研究は、大きくは、二つの成果を上げた。1)後に歴史家となったE・N・オシャーニナとA・G・マニコフが1930年代に執筆した日記や手紙の分析を通じて、彼らの知識人アイデンティティやスターリン体制への態度等を解明した。2)4人の知識人・市民が1970年代以降に執筆した回想録を分析することで、当時ソヴィエト社会に自分史を書く営みが一定の広まりを見ていたこと、家族や友人関係等の親密圏への傾斜が顕著となっていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：

This research based on the analysis of diaries, letters and memoirs written by Soviet intellectuals and citizens could obtain largely two findings as follows: 1) the attitude toward the Stalinist regime and the identity as intellectuals shown in their diaries and letters written by two later historians, E. N. Oshanina and A. G. Man'kov, during the 1930s; 2) the gradual spread of the writing of self-history among Soviet rank and file intellectuals and citizens, and their general tendency to be increasingly inclined to the intimate sphere such as families and friends, as shown in memoirs written by four persons since the 1970s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野:ソヴィエト史

科研費の分科・細目:史学・西洋史

キーワード:ロシア、親密圏、ライフストーリー、知識人、市民、日記、手紙、自分史

1. 研究開始当初の背景

ソ連崩壊後、ソヴィエト体制下を生き残った人々が残した日記や手紙などの私文書を利用し、これまで知られるところの少なかった個人の自己意識や内面世界、ソヴィエト政権の各種の政策に対する市民の評価、体制全般に対する認識といった問題群に迫ることが可能となった。権力者に送られた膨大な市民の手紙を分析し、スター

リン時代を生き残った人々の体制評価や公民意識などを明らかにしたS・フィッツパトリックの研究(Sheila Fitzpatrick, "Suplicants and Citizens: Public Letter-Writing in Soviet Russia in the 1930s," *Slavic Review*, vol. 55, no. 1, 1996)、同じく市民の手紙や内務機関の報告書などを基礎に、スターリン時代の大量の意見を分析したS・デーヴィスの研究(Sarah Davies, *Popular*

Opinion in Stalin's Russia: Terror, Propaganda and Dissent, 1934-1941, Cambridge University Press, 1997)、数多くの日記のテキスト分析を通じて、いわばスターリン主義的主体が形成されるプロセスを解明したJ・ヘルベックの研究(Jochen Hellbeck, *Revolution on My Mind: Writing a diary under Stalin*, Harvard University Press, 2006)などがその代表である。

本研究代表者も、科学研究費の給付等を受けて実施したアーカイブ調査に基づき、スターリン体制下の国民世論や人々の日常世界の解明に尽力してきたが、その調査過程で、親しい友人関係にある複数の人間が、1935年から1992年までの長期にわたり(1937年～56年の中断をはさみつつ)共同で執筆した貴重な日記を発見し、つぶさに分析することができた。つまり、H・アレントの全体主義論に代表されるような、人間的な絆が解体された「アトム化」のイメージで時として捉えられがちであったスターリン時代の社会に親密な友人関係が形成され、それが共同日記の作成という形で息づいていたこと、しかも、大テロや戦争を潜り抜けてスターリン批判後の時期に再開した日記の記述には、親密な友人関係をベースにした各種のテーマに関わる意見交換の様子が記され、いわば親密圏が公共圏に展開していたことを解明できたのである(拙稿「スターリン体制下の個人と親密圏」『思想』第952号、2003年、参照)。

従来から、アトム化テーゼへの批判は数多くあったが、友人関係や家族関係の具体像が学術的な手続きで描写されることは世界的に見てもほとんどなかった。したがって、上記の共同日記研究は、その数少ない成果の一つといえるが、さしあたり一つの素材を分析したにすぎず、さらに取り組むべき余地は多く残されており、そのことが本研究の背景にあった。

2. 研究の目的

そこで本研究は、1930年代から1980年代にわたる比較的長いタイムスパンを対象に、その時代を生きたロシアの知識人が残した日記、回想録、手紙等の資料を渉猟し、そのテキストに見られる親密圏を描写し、さらにその親密圏に基礎を置いた知的世界の実相を解明することを目指した。当初、特に解明を考えていたテーマは以下の通りである。

(1)テキストの中に見られる友人関係、家族関係に関する描写の分析を通じて、「ソヴィエト型親密圏」とでもいえる特色が見出せるかどうか。とりわけ全体主義的統制・管理を目指したとされるソヴィエト権力のなんらかの作用が親密圏の形成や親密圏のありように及んでいるのかどうか。また、時代によって親密圏のありかたに一定の変容が見られるのかどうか。

(2)テキストの中で記される知的世界の検討。知識人のライフストーリーの中で、どのようなテーマが問題となり、議論の対象となったのか。どのような社会現象に注目が寄せられ、会話が交わされたのか。読書に関する記述、文学動向への関心とそれをめぐる諸見解、さらにはソヴィエト政権の諸政策に関する意見交換の諸相。

(3)外の世界、国際社会に対する知識人の関心や認識、及びそのかかわりでのソヴィエト国家やロシアの位置づけに関する意識や意見交換の諸相。

3. 研究の方法

本研究は、ソヴィエト知識人が残した日記や回想録といった自伝的記録、および家族や友人間で交わされた手紙を史料に用い、そこに描写された彼らのライフストーリーの中に見出せる親密圏、及び親密圏に支えられた知的世界の諸相を明らかにするという方法を採用した。具体的には以下のとおりである。

(1)アーカイブ資料の渉猟・分析

モスクワにある「モスクワ個人コレクション中央文書館・博物館(TsMAMLS)」が所蔵する、ソヴィエトの作家、研究者、政治活動家などの200を超える個人文書の中から、本研究にとり重要な資料を渉猟・検討することを予定した。ただ、研究開始後、モスクワの「民衆アーカイブ文書センター」が所蔵する個人文書の一部を専門業者を通じて販売し始めたため、作業効率を考慮して、TsMAMLSでの資料調査よりも、民衆アーカイブ文書の購入と分析に力を注いだ。

(2)公刊資料の収集・分析

回想録や日記、また手紙の類は時に書物として公刊され、あるいは歴史雑誌などで発表されてきた。そこで、ロシア・ソヴィエト関係の書物や雑誌を集中的に所蔵している北海道大学図書館及び北海道大学スラブ研究センター図書室において、既刊の回想録、日記、手紙の類を収集し、分析することとした。

なお、欧米やロシアの研究でも日記や手紙などの私文書を用いた研究は盛んだが、それらは一般的に、個人の自己意識、世論一般、体制評価に関わる分析に集中している。それに対して、本研究は類似の資料に依拠しながらも、親密圏を浮き彫りにする研究方法を採用した点がユニークであると考えられる。

4. 研究成果

(1)2007年度の研究作業と成果

初年度にあたる2007年度は、先に述べたアーカイブTsMAMLSでの資料調査を中心にを行い、特に、後にロシア中世史の歴史家となり、旧レー

ニン図書館手稿部に勤務した E・N・オシャーニナ (1911-1982) の日記(1925 年~1967 年の間に執筆)及び家族との往復書簡(1933 年~1974 年)の分析に多くの時間を費やした。彼女は、1933-35 年に中国専門家の夫とともに中国に滞在した経歴をもつが、30 年代の日記に見られる彼女のライフストーリーからは、夫から自立して自らの人生を歩みなおすプロセスがうかがえ、スターリン体制下を生きた女性のキャリア形成としても興味深い知見が得られた。

以上のオシャーニナの日記を、もう一人の歴史家 A. G. マニコフ(1913-2006)が 20 代で執筆した日記の記述と比較分析する手法により、1930 年代を生きた若い知識人の知的世界の一端を明らかにすることもできた。この成果を、「スターリン体制下の世代・ジェンダー・抵抗——歴史家の青年期のライフストーリーを手がかりに」と題したパネル報告(日本西洋史学会)で披露し(2008 年 5 月)、後日、その改訂版を、松井康浩編『20 世紀ロシア史と日露関係の展望』(2010 年)所収の論文として発表した(松井康浩「20 世紀ロシア知識人のライフストーリー研究の可能性——歴史家の青年期の日記を分析する試み」)。

(2)2008 年度以降の研究作業と成果

2 年目以降は、ライフストーリー文書を精力的に収集してきたモスクワのもう一つの文書館「民衆アーカイヴ文書センター」所蔵の個人文書のコレクションを購入し、その分析に力を傾注する方針に転換した。短期間のモスクワ出張を繰り返す作業に比べて、より効率的であるとの判断による。

本コレクションには、本稿のテーマに関連する複数の個人文書が含まれているが、特に 4 つの個人文書に注目し、分析を進めた。

①A・S・ゾートフ(1902-1993)文書

1920 年代にトロツキー派に所属したため、その後、計 3 度の逮捕・投獄・労働キャンプ送りを経験した人物が 1970 年代-80 年代に執筆した 1500 頁の分量に及ぶ手書きの回想録が本文書の中心である。その全体的解読は現在進行中であるが、この作業は、異論や異議申し立てを育む対抗的な知的環境と親密圏の関わりについての手がかりを得ることを可能にするだろう。

②E・G・キセリョーヴァ(1916-1990)文書

5 年間の学校教育を受けただけの庶民キセリョーヴァの経験がつけられた回想録が含まれる。その主要なテーマは、第二次大戦の経験、夫との離別、再婚、家族の不和といったソヴィエト体制下を生きた庶民の日常世界である。キセリョーヴァは、映画のシナリオに採用されることを夢見て、自身の回想録の執筆に着手した。

③V・I・エドーヴィン(1921-?)文書

1920 年代末に始まる強制的農業集団化で「クラーク清算」の対象となった農村家族の出身で、その後、地方党組織の役人やコルホーズ議長な

どを務めた人物の回想録が中心。1970 年代の家計の記録など多彩な私文書も含まれる。

④Iu・G・ソボレヴァ(1920-?)文書

アストラハンの教員一家に生まれ、1930 年にモスクワに移住した後、モスクワ国立教育大学化学学部を卒業し、その後「血液学・輸血中央研究所」に勤務したソボレヴァが残した両親及び自分の回想録(家族 3 部作)を含む。

2008 年度以降は、以上の 4 つの回想録の分析を中心に行った。その作業を通じて得られた知見として、一つには、1970 年代に「自分史現象」とでも呼べるソヴィエト国家と自身の歴史的プロセスを自ら執筆する営みが、人々の間で一定の広まりを見せた事実である。もう一点は、すでに V・シラベントフが指摘しているソヴィエト社会の「私化(privatization)」傾向が、以上の作業を通じて再確認できたことである。後者については、特に、④ソボレヴァ文書にある「家族 3 部作」に典型的に表れている。この一連の回想録は、深い家族の絆を窺わせるトーンで貫かれており、ソヴィエト体制下を生き抜いた知識人一家の親密圏のありようの解明につながった。

以上の分析及び知見をもとに、「後期ソヴィエト体制下を生きた市民の主体性(agency)—ライフストーリー文書を手がかりに」と題した学会発表を行い(ロシア史研究会大会、2010 年 10 月)、加えて、それを査読論文として投稿し、すでに掲載されている(『ロシア史研究』87 号、2010 年)。

また、関連する研究成果としては、2009 年度ロシア史研究会大会で設置されたパネル「近現代ロシアの都市と文化」のパネラーの一人として「1930 年代モスクワの都市文化と都市的共同性」と題する報告を行い(そのプロシーディングスは『ロシア史研究』86 号、2010 年に掲載)、ここでは、「民衆アーカイヴ」の文書調査から得られた知見、特にエドーヴィンの回想録から得られた情報等を盛り込んだ。

(3)研究成果のまとめと今後の展望

4 年間にわたる研究作業を振り返ると、当初予定していた研究計画から若干の軌道修正が図られ、研究対象も、知識人の親密圏や知的世界から、一般市民のそれを含むものへと重点が移動していったことは否定できない。ただ、そのことは、従来の研究ではあまり知られていなかった一般の知識人や市民の間で広がる「自分史現象」に注目することに繋がり、ユニークな研究課題を新たに切り開いたのではないかと考える。

なお、今後も引き続き、民衆アーカイヴ文書の調査検討を継続する。特に、ゾートフ文書の全容の解明を行い、近年進めてきた作業をそれに組み合わせることで、『スターリニズムの経験——ソヴィエト市民が書いた日記・手紙・自分史』と題した研究書を 1~2 年以内に公刊することを目指している。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①松井康浩、後期ソヴィエト体制下を生きた市民の「主体性」——ライフストーリー文書を手がかりに、ロシア史研究、第 87 号、2010 年、23-39 頁、査読有
- ②松井康浩、1930 年代モスクワの都市文化と都市的共同性、ロシア史研究、第 86 号、2010 年、4-13 頁、査読無

[学会発表] (計3件)

- ①松井康浩、後期ソヴィエト体制下を生きた市民の「主体性 (agency)」——ライフストーリー文書を手がかりに、ロシア史研究会大会、2010 年 10 月 17 日、立教大学
- ②松井康浩、1930 年代モスクワの都市文化と都市的共同性、ロシア史研究会大会、2009 年 10 月 11 日、法政大学
- ③松井康浩、スターリン体制下の世代・ジェンダー・抵抗——歴史家の青年期のライフストーリーを手がかりに、日本西洋史学会、2008 年 5 月 11 日、島根大学

[図書] (計1件)

- ①松井康浩編、九州大学出版会、20 世紀ロシア史と日露関係の展望——議論と研究の最前線、2010 年、38-59 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

松井 康浩 (MATSUI YASUHIRO)
九州大学・比較社会文化研究院・教授
研究者番号:70219377